いま伝えたい
――被爆者から

〈25〉 あの日のことを話すきっかけに

北海道被爆者協会副会長　松本郁子さん（83）

白く鋭い光が

私は小学校6年生の時、広島で原爆に遭いました。白く鋭い光！　気がつくと目と耳を抑えて部屋の隅に小さくなっていました。真っ暗で息をすることもできず、のどは痛く、口の中はジャリジャリ。私は倒れたタンスや仏壇の隙間にいて、奇跡的に助かりました。どうやって這い出したのか記憶にありません。

勤労奉仕に出かけた母は行方不明のまま。通りに出ると、やけどやけがをした人が幽霊のようでした。やけどで剥がれた皮膚を垂らして着衣は焼け焦げてボロボロ。私は、いつの間にかその人たちと一緒に歩いていました。低く黒く垂れこめた雲間からバリバリ、ゴロゴロと音がしました。機銃掃射かと怖かったです。

「息子の一言から60年の沈黙を破り、核兵器廃絶、ノーモア・ヒロシマ・ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャと話せるようになった」と松本さん

下痢が続き、皮下出血も

山裾の農家の家々は戸を大きく開け放ち、避難してきた人たちを休ませてくれました。勤労奉仕の女学生が見分けもつかない姿で、次つぎと運ばれてきました。その夜は一晩中、空を焦がす炎を見ていました。やけどにうじがわき、割りばしで取っても亡くなる人が次つぎ出て、翌日から木を組んで亡骸を火葬にしました。友の燃える火を見ても涙は出ませんでした。

その後、遠方の親戚にお世話になり転々としました。8月15日に聴いた「玉音放送」に、どうして神風が吹かなかったのかと大声で泣きました。父の復員まで妹と2人、叔父の家にお世話になっていました。母もなく、家も消失し、復員してきた父の新しい仕事のため、私たちは福岡に移住しました。

私は被爆以来下痢が続き、皮下出血がありました。「広島で原爆に遭いました」と伝えても、医師は「やけどもけがもしなかったから関係ない」と貧血の造血剤・ビタミン剤を処方してくれただけでした。度重なる訴えに、ノイローゼとまで言われました。受験勉強もできず、希望の学校には進めませんでした。

息子の優しい一声に

結婚して2児の母親になりましたが、倦怠感に襲われ、床に入れば奈落の底に落ちるように感じ、眠ったら死ぬのではないかと恐怖の日々が続きました。夫はそんな私にイライラし酒におぼれ、DV（家庭内暴力）がエスカレートしました。

そのころ「長崎で被爆した母親が幼い子を残して白血病で死す」の新聞記事にショックを受け、離婚に踏み切りました。私が両親から大切にされたように、子どもは大切にしたいという一心でした。米ソの核実験が激しくなる中でも子どもたちに原爆のことは話せませんでした。母親の被爆で将来を悲観しはしないかという思いからでした。

2004年、当時49歳の息子と広島に行った折、息子に促されて初めて原爆資料館に入りました。私は正視に堪えられませんでした。写真や資料を熱心に見たり読んだりしていた息子は、見終わった後で静かに「お母さん、こんなこと一言も話してくれなかったね」と、いたわりのこもった声で言いました。

優しい一声が60年の沈黙を破り、亡くなった母やたくさんの方たちに代わって、あの日のことを話そうと決意するきっかけとなりました。